月刊

こころのとも

第十四巻
十二月号

定年制は人権侵害

米国では六七年に
定年制を
人権侵害として撤廃し
年齢差別禁止法を
制定した

日本では
新たに
政治家の定年制が
定められた

日本の会社も
段々と
能力（率）給に
変わりつつあるのに

意欲と能力のある人が
それに応じて働くのが
理想だと思うのですが

日本はそれに
逆行しているのでは

生を考え直して
みたい人は（一一九）

―空海『即身成仏義』解説（二二）―

〔（6）―4　五秘密儀軌の成仏法〕つづき

具（つぶさ）に灌頂受職（かんじょうじゅしき）の金剛名号を受く。此れより已後（いご）、広大甚深不思議の法を受得して、二乗・十地を超越す。

この大金剛○○五密瑜伽の法門を四時に於いて行住坐臥の四威儀の中に、無間に作意（さい）し修習すれば、見聞覚知の境界（きょうがい）に於いて、人・法二空の執（しゅう）、悉く皆平等にして、現生に初地を証得し、漸次に昇進す。

五密を修するに由（よ）って、涅槃・生死に於いて染（ぜん）せず着せず、無辺の五趣生死に於いて広く利楽を作（な）し、身を百億に分かち、諸趣の中に遊んで、有情を成就し、金剛○○の位を証せしむ。〈此れは儀軌法則に依って修行する時の不思議の法益（ほうやく）を明かす〉」と。

また云く、

「三密の金剛を以て増上縁と為して、能く毘盧遮那三身の果位を証す」と。

今月号は、現代語訳として『弘法大師空海全集第二巻』（筑摩書房刊）の中にある松本照敬訳のものを引用させて頂きます。

＊　＊　＊　＊

「弟子は、仏の位を継ぐ儀式においてさずかる継承者たる職位を示す金剛名号を完全に受け、これより以後は、広大にしてはなはだ深く、しかも思慮を超えた教えを受け持ち、教えを聞いてさとる者、独自にさとる者、および菩薩の位をも超越するのである。この大金剛○○（さった）の、欲・触・愛・慢の四煩悩をそのままさとりの心として観想する教えを、日夜、日常の行住坐臥において、たえまなく心がけ、身に修めるならば、見聞し認識する境界において、主観としての自我が空であるとする見方にも、客観としての対象が空であるとする見方にも執着することがなくなり、自他にことごとく平等となって、現世において、初めて深い宗教的な歓びを感ずる段階を体得して、次第に高い境地に昇進してゆく。五密瑜伽の教えを修めることによって、さとりの境界たる涅槃にも、まよいの境界たる生死の世界にも染まらず、執着

しない。地獄・餓鬼・畜生・人・天という五つの生存領域のはてしなき生死の中にありながら、広く他者を利益し安楽ならしめ、身体を百億に分かって、もろもろの生存領域に思いのままに行って、人びとに金剛○○の位を体得させる」〈この文は『五秘密儀軌』の規則によって修行するときに得られる、思惟を超えた仏法の利益を明らかにする〉。　（「さった」は薩と、土へんに垂です）

また、『五秘密儀軌』にいう。

「三密修行という金剛のようにゆるぎなき修行を、力すぐれた機縁として、よく毘盧遮那仏の三つの身体――真理そのものの身体と、功徳の報いを楽しむ身体と、衆生に応じてあらわれる身体――の仏としての境地を体得する」と。　（「さった」は薩と、土へんに垂です）

＊　＊　＊　＊

今回は前回の続きで、五秘密法について述べられています。分かりにくいところを、少し解説して行きたいと思います。

まず、現代語訳にあります「この大金剛○○の、欲・触・愛・慢の四煩悩をそのままさとりの心として観想する教え」ですが、このままでは、何のことかお分かりにならないと思います。先月号でも参照させて頂きました佐和隆研編『密教辞典』（法蔵館刊）の「五秘密法」の見出し項目には次のように書かれています。

「欲望の発展経路は、先ず何ものかに対して欲望を起こし（欲）、それに近づいて触れんとし（触）それを愛して心から離れなくなり（愛）、遂にそれを自由にし、我がものとして喜び（慢）を得て完成する。性・名誉・物欲等に通じる。然し、発心して悟りに到る経路も（自利）、また菩薩の衆生救済の経路も（利他）、皆この順序をたどる。故に密教では欲を捨てず恐れず、欲触愛慢の四煩悩の業用（ごうゆう）を転じて大貧大欲を起こし、毒薬転じて我執を破る薬として速やかに無上菩提を証し、衆生救済の情熱にかえんとする法で、欲触愛慢の四金剛菩薩と、その本体たる浄菩提心を表す金剛○○の五尊を本尊とし、煩悩即菩提・即事而真の秘趣を成ずるので五秘密法という。五秘密儀軌を本拠とする。」

私は、「欲・触・愛・慢の四煩悩」という現代語訳を読んで、即座に、これらが私の「人間精神の心理学モデル」の意識水準の四つの機能に対応していると直観していたのですが、この密教辞典に接して確信しました。欲は①情動―感情に、触は②感覚―運動に、愛は③認知―言語に、慢は④自我―人格に、それぞれ対応していると思うのです。そして、金剛○○は、無意識（ずい）領域に宿っておられるのだと思うのです。愛と③認知―言語

との対応は不自然のように感じられるかもしれませんが、人間がある対象に執らわれていく（「愛執」を懐く）のは、それが何であるかを認知―言語機能でしっかりと捉えるからなのです。

真言密教では、煩悩を否定しません。顕教（真言密教以外の仏教宗派）では、四弘誓願（しぐせいがん）の中に、「煩悩無尽誓願断」というのがありますが、でも、密教では四弘誓願に代わるものとしての五大願の中に、煩悩無尽誓願断はなく、それに代わるものとして「福智無辺誓願集」があります。「福と智は無辺なので誓い願って集めよう」ということですので、煩悩と言えば煩悩と言えます。それを、「断つ」のではなく「集める」わけですから、全く方向が逆のように思えます。

でも、それは、私の理論で言いますと、「自己モーメント」の基本命題にありますように、どこまでも「自分自身を知ることを目指して、より善く生きようとする」限りにおいてなのです。自分自身をもっと知ろう、もっとより善く生きよう、と欲すれば欲するほど、ある意味で煩悩が強いと言えるわけですが、しかし、それが強ければ強いほど、（説明は省略しますが）「絶対自己の自覚」に至れるわけですので、前述の福智無辺誓願集が唱えられるわけです。

次に、辞典からの引用にあります「煩悩即菩提・即事而真（そくじにしん）」ですが、私の理論で言いますと、煩悩が即菩提となり、即事が而真（＝現象が即絶対）なのは、無意識（ずい）での自己モーメントと他己モーメントとの統合が成るときと言えます。無意識（ずい）でのことですから、意識してそうできるわけではありません。意識してできることは、ただひたすらに、それを目指して修行するだけです。

次に、現代語訳にあります「自他にことごとく平等となる」ですが、もう何度か触れましたように、「ずい」での自他の統合が成りますと、あらゆるこの世の存在が、みんな自分と一体であると実感するのです。光が、星が、山が、草が、木が、道端の花に付いた露の玉が、すべて自分と一体と感じられるのです。そして、あらゆる執着が消え、こころがこの上なく満たされ、澄んでいて、あらゆる現象が清浄に感じられるのです。少し後に出てきます「身体を百億に分かって」とは、そういうこころの状態を言っているのではないかと思います。

でも、現代は人々の精神が、自己を肥大させ、他己を萎縮させていますので、ここに述べられていますように、「人びとに金剛○○の位を体得させる」ことは、困難さを極めているように思えます。

自作詩短歌等選

自己主張を抑圧しない

大阪府河内長野市で
両親を殺傷した大学生と
その恋人の十六歳の少女
を
取材した野田正彰教授は
次のように語ったという

こうすべきという
「型」の押し付けではな
く
あなたは何がしたいのか
という問いかけが
これからの教育には
必要だ
自己主張を抑圧しない
地域や学校の教育が
求められている
と

型（＝規範）を教えず
自己主張ばかりを
奨励しているから
こんな他己の欠如した
子どもたちが育つのに

折檻で刻む心の傷

折檻で
こころに負った
深き傷
意識になくも
消えることなし

昔折檻と今虐待

親よりも
子どもはいつも
弱きもの
昔折檻
今は虐待

モラルと人間性が必要

京都大学教授で
国際政治学が専門の
中西輝政氏は
政治の根幹は
モラルや人間性にある
という

いまほど
それらが失われた時代は
ないというのに

不綺語戒を犯す総理

ノンフィクション作家の
佐野真一氏いわく
小泉氏には
自分の脳髄を
一回も通過せずに
言葉を吐いている
という印象しか
ありませんと

私は
小泉氏は
不綺語戒を
犯しているとしか
思えないのだけれど

認識不足の日本人

スイス・
世界経済フォーラムの
（ＷＥＦ）
国際競争力調査によれば
日本の金融システムは
世界１０２ヵ国中の
最下位とされたらしい

それに対して
経済評論家は
世界最下位とは
何事だと
怒っている

認識が足りない
国家債務が
７００兆円あるのを
何と考えているのか
そんな国がどこにある

その債務は
銀行からが
大部分なのだぞ

神仏の愛

人ならば
人を愛する
義務やあり
仏や神の
無私の愛もて

人を愛せよ

人多き
人の中でも
人孤独
人を愛せよ
人を敬え

幻想的世界への逃避

河内長野市の
家族殺傷事件では
男女二人で
幻想的・妄想的な世界に
浸って行ったという
まさに他己萎縮した人の
とる行動だ

真の自己肯定が
得られない
裏返しとして
死への願望をもち
互いに肉体を
求めあうことで
自己肯定を感じ
死への願望を
満たすために
道連れとして
手近で安全な家族を
選んだのだ

女子生徒（十六）の詩
一緒に生きる
相手ではなく
貴方は
一緒に死ねる相手で
在るから
愛しています
とても

自己肥大を煽る

大阪府教委は
河内長野市の
家族殺傷事件で
スクールカウンセラーを
増員する方針という

他己のない生徒に
カウンセリングしても
ますます
自己肥大を煽るだけ

自作随筆選

自己の絶対化

今年から、学校での教師による子どもたちの評価方法が、相対評価から絶対評価に変わりました。

それにともなって、子どもたちの成績に激変が起きたようです。それまで成績の良かった子が普通になり、普通だった、あるいは悪かった子が、良くなるという例が、かなり出たようなのです。

なぜそんなことが起きたのでしょうか。以下、私の解釈を述べてみたいと思います。

まず、相対評価と絶対評価の比較ですが、これまで行われてきた相対評価では、原則として、その子の学力や行動が、他の子と比較され、それらが集団の中でどういう位置を占めるかで、成績が「客観的・相対的」に決まりました（付け加えておきますが、相対評価には到達度評価のように直接的に集団内での相対的位置で決まらない評価もありますが、しかし、それも、ある学年で学ぶのがふさわしいとする、過去の経験から設定された標準や基準と比較することになっていることを忘れてはなりません）。他方、絶対評価では、その子なりに一生懸命努力しているかどうかを教師が「主観的・絶対的」に判断することで、成績が決められるわけです。

もう少し言いますと、前者では、客観的にテストしてその成績の善し悪しで、多くは成績が決まるわけです。ところが、後者では、客観的なテストの成績は、問題ではありません。たとえ教科内容を理解していなくても、その子なりに積極的に授業に参加しているように教師に見えるかどうかで成績が決まるということです。

こうなりますと、学校の授業が物足りないと感じるほど理解が早い子にとっては、普通の子に合わせた授業は大抵は、退屈なものとなり、教師の質問にも積極的に答えないという傾向があると思いますが、そういう子にとって、絶対評価では、成績は必然的に悪くなるということになります。それに反して、教師の授業の進め方が丁度自分の理解度にあっていると感じる子にとっては、積極的に授業に参加できるでしょうから、当然、教師の印象もよくなり、「一生懸命やっている」と教師は主観的・絶対的に判断し、良い成績を与えることになります。また、たとえ分からなくても、積極的に挙手していれば、そのことを民主主義教育では評価しますので、「よくやっている」と教師は見て、良い成績を与えることになり

ます。また、教師の授業がたとえ自分の進度に合わなくて、よく理解できなくても、積極的に手を挙げる子も、良い評価が与えられることになります。なぜなら、「積極的で、自分なりに一生懸命やっている」と評価されるからです。そうした場合、分からなくても手を挙げて当てられた生徒は、「忘れました」と答えるのですが、教師は、それに対して「思い出したら答えてちょうだい」と言って決して叱らないのです。

こうして、絶対評価制度では、これまでの相対評価と違って、成績に激変が起こるというわけです。このことは何を意味しているのでしょうか。少し考えてみたいと思います。

これまで、何度も述べてきましたように、自己追求制度である民主主義の下では、人々は段々と宗教や信仰を失い、規範意識を薄くして行きます。

飛躍するかも知れませんが、それは、実は、規範意識を自己に中心化すること、自分を規範だとすること、つまり自己（個）を絶対化するということでもあるのです。いま見ましたように、今年から、相対評価を、教師が自己中心的・主観的に子どものを評価する「絶対」評価制度に変更したことは、人々が自己を絶対化していることを如実に示しているというわけなのです。

一般的に人間を評価するという時、文字通り、絶対な評価の名に値する評価は、精神的に解脱して「絶対な境地」に至っているか、それとも「相対な世界」に止まっているか、という点に関するものしか存在しません。

それは、学校に関して言いますと、教育基本法の第一条で規定しています教育の目的としての「人格の完成」が成し遂げられているかどうかに関わるものです。

最近、我が大学の学部学生に「人格の完成とは何か」について調べてくるように課しましたが、私にとって、一つとして満足できるものはありませんでした。

民主主義では、全てが相対化して行きます。善悪も、真偽も、美醜も、正邪も、全てが相対化して行くのです。つまり、最終的には、相対な精神世界に住む人々の多数決で、それらが、決定されるということです。絶対な境地に達した人（私が四聖とする人たち）の説く絶対的な教えや真理も、全て相対化されてしまいます。

ですから、人格の完成といっても、それはどこまでも相対なものでしかありません。ということは、それを定義する人ごとに、人格の完成があり得るということです。前述の学部学生のレポートの通りなのです。一つとして真に人格の完成を言い当てるものはなかったのです。勿論、学生たちは、様々な参考書を調べたり、インター

ネットで調べたりして書いてきていることは、ことわるまでもありません。

このように、一人ひとりが、人格の完成という完全な絶対価値を、自分の主観的判断に還元してしまうことが、まさに自己の絶対（価値）化と呼べることなのです。民主主義の進行によって、客観的な行動基準（つまり信仰や規範、英語で言いますとａｘｉｏｍ）を喪失しますと、人々の判断は、自己に閉じて行きます。それは、自己の「情動」に判断（や行動）の基準が置かれるということです。情動は、自己の①欲望（性欲・食欲・優越欲）、②情緒（快不快・喜怒哀楽など）、③気分などです。それは、経済学の言葉で言いますと、自己の「利益と選好」ということになります。つまり、自分の利益になったり、好きなことが、善であり、真であり、美であり、正であるわけです。

学校で行われる絶対な評価という観点で言いますと、いま見ましたように、人格の完成も相対化していますので、正に教師の主観的判断が絶対化することになってしまうのです。それは、客観性を要求される評価がその根本的意味を喪失してしまうことを意味します。そして客観性を欠いた評価は、不公平そのものだと言えるものになりさがるのです。学校が形骸化すること必定です。

釈尊のことば（一二八）

―法句経解説―

（三八四）バラモンが二つのことがら（止と観）について彼岸に達した（＝完全になった）ならば、かれはよく知る人であるので、かれの束縛はすべて消え失せるであろう。

これも、なかなか難しい偈のように思えます。解説して行きます。

まず、「二つのことがら、止と観」ですが、中村元著のテキスト『ブッダの真理のことば感興のことば』（岩波文庫）の訳注には次のように書かれています。

「心を練って一切の外境や乱想に動かされず、心を特定の対象にそそいで心のはたらきを静めるのを「止」といい、それによって正しい智慧を起こし、対象を如実に観るのを「観」という。止めて観るのである。互いに他を成立させ、仏道を全うさせる不離の関係にある。」と。

なお、この止と観は、天台宗では「止観」とつづめて言われ、『摩訶止観』という本が有名です。そこでは、天台宗での実践修行が体系化されています。

さて、止と観ですが、これらは、これまで何度か紹介

してきました、「五分法身（ごぶんほっしん）」と呼ばれます「戒・定・慧・解脱・解脱知見」の定と慧に相当するものです。なお、前の三つは「三学」と呼ばれます。

（1）「戒」律（例えば、十善戒である①不殺生、②不偸盗、③不邪婬、④不妄語、⑤不綺語、⑥不悪口、⑦不両舌、⑧不慳貪、⑨不瞋恚、⑩不邪見）を守り、ひたすら（2）禅「定」（一種のヨーガ）に励むとき、（3）智「慧」が得られ、仏教の教えが心底、理解できるようになる、ということです。そして、さらに修行を深める（たとえば真言密教の修法を行う）とき、精神的にあらゆる束縛や執らわれから解放されて（4）「解脱」にいたり、安らかで自由であると自覚する（5）解脱知見が得られるのです。その結果、あらゆる現象の真実が如実に見えてくるというわけです。

次に出てきます「かれはよく知る人である」という文章ですが、何を知るかと言いますと、いま述べましたように「あらゆる現象の真実」を知るということなのです。そこには、人間の生きる真実も含まれています。私たちを束縛するものは、いろいろありますが、最終的に残る束縛は、自分が決定的に否定される「死」だと言えます。死を意識するとき、どんなに思い通りに自分の「情動」を満たしてみても、束縛から完全に逃れていないことに気付くのです。

その束縛を逃れる道は、われわれ人間存在の真実に気付き、それを知ることです。この知るという言葉ですが、私の言う認知―言語で知るのでは足りません。ソクラテスの言葉に「汝自身を知れ」というのがありますが、この知と同じ知です。私の言葉で言えば、「絶対自己の自覚」ですし、仏教の言葉で言いますと、「天上天下　唯我独尊」です。

無意識（ずい）に宿す如来さまと一体になりますと、自分の生命は、仏さまのおぼしめしの通りで、お迎えがくれば、喜んで行くことができるのです。死の束縛から自由になり、何ら恐れることもなければ、執らわれることもありません。しかし、だからといって、自暴自棄になって命を粗末にすることにはならないのです。どこまでも、命を大切にし、節制に努めるのです。それは、自分の命を生きるためではなく、他者への奉仕のためなのです。こうなる事が、「よく知る」という事なのです。

なお、この偈に似た偈が、既に、出てきました。それは次の偈です。〔（八九）覚りのよすがに心を正しくおさめ、執着なく貪りをすてるのを喜び、煩悩を滅ぼし尽くして、輝く人は、現世において全く束縛から解きほぐされている。〕平成六年（第五巻）五月号でとりあげて

います。ご参照ください。また、次の偈の彼岸についても同号で取り上げられています。

（三八五）彼岸（かなたのきし）もなく此岸（こなたのきし）もなく、彼岸・此岸なるものもなく、怖れもなく、束縛もない人、――かれをわれはバラモンと呼ぶ。

この偈もなかなか難しいと思います。専門家の間でもそうらしく、中村元著のテキスト『ブッダの真理のことば感興のことば』（岩波文庫）の訳注にも、原語での検討がなされ、そのことが書いてあります。私は、ここに訳された限りで、解釈しておきたいと思います。

言葉の意味ですが、「彼岸」とは、解脱して達した彼方（あちら）の岸、つまり涅槃の境地であり、「此岸」とは、煩悩に支配されている此の岸、つまり迷いの世界です。言い換えますと、絶対な境地の世界と相対な境地の世界と言ってもよいと思います。

さて、偈にあります「彼岸もなく・此岸もなく、彼岸・此岸なるものもなく」とはどういうことなのでしょうか。同じ言葉が繰り返されているだけのように思えます。言葉通り受け取りますと、彼岸や此岸そのものにも執らわれないし、彼岸や此岸というもの、つまりそうした観念にも執らわれない、ということを言っているのではないか、と思われます。

でも、仏教では、涅槃の境地に到るのが、求めるべき理想なのに、それがない人が、なぜ、バラモン、つまり理想の人ということになるのでしょうか。

次に出てきます「怖れもなく、束縛もない人」については解釈するまでもありませんが、右の部分の解釈が、なかなか難しいようです。

私は、次のように解釈したいと思います。

釈尊のお弟子さんの中にも色々な器量や性格の人がいて、彼岸にまだ達していないとか、彼岸とはどんなことなのか、といったことばかり詮索したり、議論したりする人があったのだと思います。そうした人に説いて聞かされたのが、この偈ではないでしょうか。そんなことを詮索するより、「何ものをも怖れるな、何ものにも束縛されるな」「そうした人が、バラモンなのだ」と諭されているのだと思うのです。

解脱に達しますと、正に、そうした彼岸も此岸も全く問題にならないのです。この世に「いま、あるがままにある」だけなのです。それは、生死さえも超越していると言える世界なのです。

後記

一、今年は、雪が遅く、少ないようです。スキーヤーにとっては、正月に滑れるかどうか気になるところです。

二、先月、広島大学で開かれた中国四国心理学会に、二人の共同発表者と共に出席してきました。自殺について発表しました。すべてが、ポスター発表でした。懐かしい人とも会うことができました。

三、先月号のこの欄で定年制は悪平等ではないか、と書きましたが、そのあとで、今月号に詩として載せましたように、アメリカでは定年制は人権侵害として、すでに、二六年前の六七年に年齢差別禁止法が制定されていたことを、知りました。うべなるかな、という思いです。

四、十月号で、カボチャを発泡スチロールの箱に詰めて保存したと書きましたが、失敗だったようです。半分ほどが腐ってしまいました。いまは、外に出して、並べています。お百姓さんに聞きましたが、どんなにしても、腐るように思うということでした。

五、さつま芋を掘りました。よくできていて、たくさん採れたのですが、よく雨が降ったせいか、味はもうひとつです。でも、ストーブの上で、じわじわ焼くと結構、頂けます。また、昨年（第十三巻）の三月号の後記で紹介しました「きんとん」を、久しぶりに作ってみましたが、美味しく頂けました。

六、ＮＨＫラジオ深夜便「こころの時代」（朝４時台放送）で、病理学者・家森幸男氏の話を聞き、著書を買いました。『ついに突きとめた究極の長寿食』（洋泉社刊・定価七二〇円）です。その中に、いま話題の「カスピ海ヨーグルト」の入手法が書いてあり、買いました（千円）。早速作りましたが、常温で、きめの細かいヨーグルトが簡単にでき、美味しく、たくさん頂いています。芋の「きんとん」もそれを入れて作りました。一度、種菌を入手しますと、それで出来たものをまた種菌として、何度でも作れます。健康・長寿によいそうです。

月刊
こころのとも
第十四巻
十二月号
（通巻
一六八号）

平成十五年十二月八日
〒７７２―８５０２
徳島県鳴門市鳴門町高島
鳴門教育大学　障害児教育講座気付
（ひびきのさと　沙門）中塚　善成（ぜんじょう）

本誌希望の方は、郵送料として郵便振替で年間千円を次の口座にお振り込み下さい。加入者名　ひびきのさと　口座番号０１６１０―８―３８６６０